

(鹿児島県)

「従来&次世代」エネルギーを融合 子育てしやすい未来のまちづくり

合併から大きく進展 劇的に変化したまちづくり

鹿児島県下で最大の市域(約683km²)を有する薩摩川内市は、平成16年10月、旧川内市・樋脇町・入来町・東郷町・祁答院町・里村・上甕村・下甕村・鹿島村(※旧川内市以外は旧薩摩郡)の1市4町4村の合併により、誕生した。

人口は県内4位の約9万5000人(平成29年8月現在)。合併時の10万3000人強からは約8000人減少している。しかし、薩摩川内市は県都・鹿児島市(60万人弱)をはじめ、姶良市(約7万6000人)など、県内人口集積地と市域を接している。また九州新幹線始発駅・鹿児島中央駅からは新幹線で最短11分の至近距離だ。鹿児島県の中核ラインにおいて、まさに「要」的な位置付けにあるといえる。

さらに国際貿易港・川内港を通じ、韓国・釜山航路(週2便)、台湾航路(基隆・高雄、週1便)、国際フェリー航路(神戸経由、豪州・欧州便など週1便)など、世界への扉が直接的に開かれている。鹿児島空港からも車で70分前後と近い。

そうした立地環境の優位性などから、薩摩川内市は企業立地の面からも「南九州の拠点都市」としての評価が近年、急速に高まりつつある。特に川内港沿岸、川内港に注ぐ川内川・河口部付近の沿岸、新幹線および国道3号沿いなどの地域を中心に、市内3カ所の工業団地と併せてエネルギー産業、電子部品、金属加工、食品など、各種の製造業がバランス良く立地している。

中でも近年、非常に目立つのが、次世代エネルギー関連の事業環境の向上と集積化への動きだ。

薩摩川内市ではご承知のように、九州電力による火力発電所(50万kW×2)および内燃力

いわきりひでお
岩切秀雄
薩摩川内市長



発電所、現在全国で最初に再稼働を果

たした川内原子力発電

所(89万kW×2)の存在がよく知ら

れている。こうした基幹エネルギー(電

力供給)産業の経験を生かす形で、薩摩川

内市では持続可能な次世代(自然)エネ

ギー産業への取り組みも、非常に活発化し

つつある。

この次世代エネルギー産業への精力的な



薩摩川内市が最高に盛り上がる「川内大綱引」(大綱は直径40cm、長さ365m。毎年9月秋分の日の前夜に開催)



川内港～甑島を結ぶ高速船「甑島」とモダンなデザインの「川内港ターミナル」

取り組みの詳細については後に述べるが、合併から14年目を迎えた薩摩川内市にはその間、実にさまざまなトピックがあった。



室内装飾に木板を採用して評判の九州新幹線800系

「まず何といっても九州新幹線的全線開業により、大阪・名古屋・東京方面はもちろん、全国をネットワークする新幹線網と直接的、間接的に結ばれたのは、歴史的な出来事といえます。また南九州西回り自動車道の整備が随時、促進されていったほか、合併以来の悲願ともいえる甑島と川内港を結ぶ高速船「甑島」の就航が実現するなど、本市をめぐるまちづくりの環境は大きく進展、劇的に変化してきました」

旧川内市の職員として40年近いキャリアを持ち、川内市助役から薩摩川内市助役・副市長を経て、平成20年11月に市長に就任。現在3期目を迎えた岩切秀雄市長は、トータル50年以上にわたり、薩摩川内市エリアの変化を中枢部で体感しつつ、推進役を担ってきた。



“スマートハウス”と市内各所に設置された“EVチャージポイント”

その間には昭和

59年および60年の川内原発の運転開始（1号機・2号機）、東日本大震災による稼働停止（平成23年）、全国初の再稼働（1号機・平成27年9月、2号機・同11月）という日本のエネルギー史上における屈指のトピックの渦にも

直面しながら、粘り強い牽引力で、地域運営を遂行してきたのである。

「薩摩川内市のエネルギー産業」というと、川内原発関連のイメージがやはり先行しがちです。しかし実は、東日本大震災の発生以前から本市では、火力発電所・原子力発電所を

中心にエネルギー産業が立地してきた経験を土台に、官民一体となった『次世代エネルギーを活用したまちづくり』を推進してきました。震災後には国の新しいエネルギー政策を踏まえ、平成25年3月に『次世代エネルギービジョン・行動計画』を策定するなど、次世代エネルギーへの取り組みをさらに本格化しつつ、現在に至っています（岩切市長）

薩摩川内市による次世代エネルギーを活用したまちづくりは、実際、非常に多角的、かつ多彩に推進されている。

薩摩川内流・次世代エネルギーの取り組み

その端的な事例として、まず川内駅東口に程近い「スマートハウス」を訪ねた。

薩摩川内市の設置したスマートハウスは、太陽光発電システム、家庭用燃料電池、蓄電池、地中熱ヒートポンプシステムなどを備えたモデルハウスだ。国も推奨するHEMS（ホーム・エナジー・マネジメント・システム）により、いわゆる「エネルギー（電力）の見える化」とともに、家電や電気設備などを最適な形で制御する様子を、具体的な設備を使い、「創エネ・蓄エネ・省エネ」の観点で市民に体験（体感）してもらう仕組みを構築している。平成26年10月の設置以来、これまでに1万人の来場者があったという。

なおこのスマートハウスでは、ワークショッ



市内各所でみられる「メガソーラー発電所」

プなども随時開催されており、市民参加による、次世代エネルギーを前提にしたまちづくり交流拠点としての役割も果たしている。

そのほか、薩摩川内市における次世代エネルギー関連事業は、およそ次のような形で多彩に展開されている（次世代エネルギー課『次世代エネルギー関連事業の進捗状況について』より）。

【見守り支援サービス実証事業（平成26・27年度、高齢者見守りサービス）／スマートハウス管理事業（前出、平成26年〜継続中）／次世代エネルギーフェアの実施（随時）／F Mさまざまなだいの番組を活用した普及啓発事業（週1回継続中）／市民への普及啓発に向けた次世代エネルギーブックレットの発行（配布、

薩摩川内市

市 政 ル ポ

(鹿児島県)



甌島に導入されたEVと蓄電池実証設備全景



出前講座での活用など)／地球にやさしい環境整備事業(HEMS導入などの補助事業)／公用車EV導入事業(平成26年、計10台)／川

内駅・低炭素化実証事業(平成28年)／「竹バ
イオマス産業都市構想」推進事業(平成28年に
協議会設立、竹の高機能活用など)／甌島E
Vレンタカー導入実証事業／超小型モビリ
ティ導入実証事業(地域での活用、観光活用
等)そのほか、多数」

すべてを挙げていけば、それだけで紙数が
尽きてしまいかねない。ここでは川内港と高
速船で結ばれている有人離島・甌島における、
注目すべき次世代エネルギー関連の事業を
ピックアップしたい。

その事業とは薩摩川内市が住友商事、日産
自動車との連携で今年4月、上甌島にEV
(日産e-NV200)を40台導入し、始動し
た「みらいの島共同プロジェクト」だ。薩摩川
内市では平成27年度から、まず住友商事と共
同で上甌島へ、EV導入の布石として蓄電池
システムと太陽光発電システムを設置した。
この蓄電池は日産の電気自動車・リーフ用36
台分のリユース蓄電池だった。今春に導入さ
れたEVも、この日産リーフと同タイプの蓄
電池を搭載しており、既にあるリユース蓄電
池との連携が図られていく。

「同時に今回のEV導入で、甌島を走るE
Vに搭載された電池は、島内限定の定置型蓄
電池として再利用することが持続的に可能に
なる」(岩切市長)わけだが、次世代エネルギ
ー課ではこのサイクルを、「薩摩川内市が着目
している次世代エネルギーの、賢い使い方
の象徴的なプロジェクト」と位置付けている。

同プロジェクトが「みらいの島共同プロ
ジェクト」と呼ばれるゆえんでもあるが、甌
島という限定された地域内でのこの持続可能
な次世代エネルギー循環の様相は、観光振興
の面からも大きな「ウリ」になることが予測さ
れる。

「みらいの島・甌島」の 振興とさらなる未来化！

折しも今年4月、甌島地域は施行されたば
かりの『有人国境離島法』により、特定有人国
境離島地域の一つに指定された。

「それによって、甌島地域には各種の地域
社会維持推進を目的とする交付金をいただけ



2020年に完成予定の「蘭牟田瀬戸架橋」



毎回1万発以上の花火が打ち上げられる「川内川花火大会」(8月)

ることになりました。甕島は平成27年3月の国定公園指定を前に、甕島と川内港を結ぶ高速船「甕島」が平成26年4月に就航いたしました。同時に新幹線が停車する川内駅と川内港をつなぐ国内初的大型電気バスによるシャトルバスも運行するなど、観光客誘致の努力を続け、成果が上がり始めていたところです。今後は特定有人国境離島地域の指定で、地域振興により拍車がかかることが期待できます(岩切市長)

甕島は観光振興と次世代エネルギーの双方の壮大な実証の場であるとともに、薩摩川内市における両事業の行く末を握るキーポイントになりつつある、ともいえるだろう。

甕島ではさらに、合併から2年後の平成18年に開始された、上甕島と下甕島を結ぶ長さ1.5kmの「蘭牟田瀬戸架橋」の進捗が目まぐるしく進む。

「蘭牟田瀬戸架橋は、観光振興はもちろんのこと、合併以降、最大の懸案の一つとして

推進してきた地域格差の解消と、市民の一体感醸成の仕上げる意味でも、非常に重要な事業と考えています。

本来であれば平成30年度に完成の予定でありましたが、平成32年度に延長となったのは残念です。しかし、平成32年は2020東京オリンピック・パラリンピックの年でもあると同時に、10月には第75回『燃ゆる感動かごしま国体』が、薩摩川内市など鹿児島県各地で開催されます。蘭牟田瀬戸架橋がそのときまでに完成していれば、インバウンドも含めた観光需要が新たに掘り起こされる可能性があると考えております(岩切市長)

実際問題、豊かな大自然と深い歴史に彩られた上甕島並びに下甕島が架橋で結ばれ、そのスペクタクルで繊細・華麗な自然景観の中を、未来的な風貌の超小型EVが縦横に走り回る光景を想い浮かべるだけでも、旅心がいやが上にも刺激されてくる。

真夏開催の東京オリンピックに続いて、旅のトップシーズン・10月開催の国体を契機に、鹿児島エリアを訪れる国内外の観光客はかなりの数になることも予測される。そんな状況下、上甕島と下甕島が架橋で一体的に結ばれる洋上の「みらいの島・甕島」はきっとツーリストたちの重要なオプシヨンの一つになるだろう。

さらに「この国体開催に併せて、本市では川内駅東口前の広大な市有地を活用し、コンベンション施設を建設する予定です。現在、事



奇岩・断崖の多い甕島を象徴する「名所・ナボレオン岩」

業者の選定を急いでいるところですが、国体までにはぜひ完成させたい」と岩切市長。

また前出のスマートハウス事業を進展させ、丸ごと一つの街をスマート化し、生活展示する「天辰地区(川内川の内陸部沿岸地区)スマートモデル街区プロジェクト」も、国体開催までには完成を目指しているのだという(平成30年10月から整備開始)。この事業の行く末も、次世代エネルギーへの取り組み、および観光振興の両面から見逃せないところだ。

子育て世代にやさしい「イクボスのまち」

さて薩摩川内市にとって目下最大の懸案といえ、全国共通の課題でもある人口減少の抑制への取り組みだ。

薩摩川内市

市 政 ル ポ

(鹿児島県)



「イクボス宣言」に大集合した120人。イクボスは市内の民間企業にも増殖中！

これまでご紹介してきた次世代エネルギー推進への取り組みや、甕島の地域振興並びに観光振興への取り組みなどへの動きは、近い将来、雇用の場の創出に結び付く可能性も高い。また冒頭でご紹介したように、薩摩川内市の産業立地面における優位性は、既に各産

業界からの評価が定着しつつある。

薩摩川内市ではそうした雇用面での将来性に加え、平成27年度の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」および「人口ビジョン」の策定を契機に、各種の子育て支援策も着々と推進し、人口減少の抑制に努めてきたが、今年4月には、その中心的役割の一翼を、主に「女性活躍推進事業」「少子化対策事業」の側面から担う「ひとみらい政策課」を新設した。

この「ひとみらい政策課」が、初年度（平成29年度）の女性活躍推進事業として掲げているのは「ひとみらいミートینگ」「市イクボス宣言式（7月）」「薩摩川内市女性活躍推進協議会の設置（8月）」「ダイバーシティイマネジメントセミナー実施（2講座開催予定）」「女性活躍推進の見える化（女性活躍推進に関する情報発信等の公式サイトによる一元化）」「女性活躍推進に係る優良企業に関する、住民等への情報発信」「市・各課主催事業のすべてにおいて託児事業を実施（ひとみらい政策課で一括計上）」など。

中でも7月28日に実施した「イクボス宣言式」は、マスコミ報道などでも大きな話題を呼んだ。

「市役所の会議室に私や市議会議長をはじめ、行政機関の長、市役所のすべての部課長など計120名が集まりまして、イクボス宣言を行ったわけです。イクボス宣言をする自治体は全国各地で急速に増えています。私たちの宣言が実は鹿児島県内の市町村では初

めての例だということで、新聞などにも大きく報道されたのです」（岩切市長）

市長をはじめ、すべての管理職が「イクボス」となり、市職員の仕事と子育て、介護、地域活動などとの両立を支援するとともに、地域社会が一丸となった子育てしやすいまちづくりを推進し、少子化対策につなげることを意図するイクボス宣言――。

女性活躍社会を推進するだけでなく、人口減少抑制の最大の良薬ともいえるべき、子育て世代の誘致にはまさにピッタリの施策だ。

特に男性的な気風の社会風土が、歴史的にも知られる鹿児島県内で、薩摩川内市がこれを初めて行ったという事実とその情報発信力は、イクメン志望者が多いとされる現代の若い男性のみならず、世の女性たちにも高い好感度をもたらしたのではないだろうか。

以上、薩摩川内市の合併以来の足跡とともに、多方面にわたって展開されている、創意工夫あふれるまちづくり事業のあらましを、ごく一部ではあるが、駆け足でご紹介させていただいた。

その上で改めて感じるのは、豊かな自然環境と歴史の深さに裏打ちされた堅実な社会風土の健在ぶりと同時に、新しい試みに次々チャレンジしていくその進取の気性の発露ぶりだ。その当面の成果が集約して表れるに違いない「平成32年の薩摩川内市」の様相が、とても楽しみだ。

（取材・文＝遠藤隆／取材日平成29年9月28日）